

平成28年度（第38回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 平成28年9月24日(土)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

はじめに

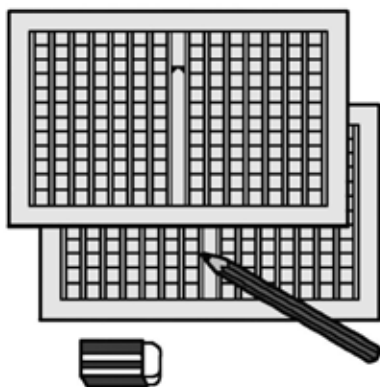
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で三十八回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身と言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様には厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



もくじ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

祭り囃子を受け継いで

金沢市立清泉中学校

三年 當山 絢香……………3

優秀賞

思いやりの方法

白山市立笠間中学校

三年 鶴来里衣菜……………4

夢へと続く道

金沢市立森本中学校

三年 中村 優花……………5

奨励賞

心通い合わせるために

七尾市立中島中学校

三年 横山 絢音……………6

平和な未来を築くために

加賀市立東和中学校

三年 毛利 柚葉……………7

夢を使命に

七尾市立御祓中学校

二年 宮下 歩土……………8

大切な人に今伝えるべきこと

七尾市立七尾東部中学校

三年 吉島穂乃佳……………9

あと一歩、もう一歩

石川県立金沢錦丘中学校

三年 玉川 未琉……………10

身近な幸せ

能美市立根上中学校

三年 越田 瑞生……………11

割れたガラス

七尾市立能登香島中学校

二年 多田 拓哉……………12

共に住む世界

野々市市立野々市中学校

三年 澤村 夏渚……………13

読書から学ぶこと

白山市立光野中学校

二年 川上結衣花……………14

なりたい自分

金沢市立高尾台中学校

三年 寺本 汐里……………15

人生楽しんだもん勝ち

かほく市立宇ノ気中学校

三年 東 知南……………16

メディアが伝えるもの

加賀市立橋立中学校

三年 吉田 帆乃……………17

逃げないこと

能美市立辰口中学校

三年 中川 理子……………18

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査委員講評……………19

石川県教育委員会事務局 学校指導課 課参事 日向 正志

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎平成28年度少年の主張全国大会

「わたしの主張2016」 内閣総理大臣賞受賞作品……………26



「ピーピーヒヤララ、ピーヒヤララ」篠笛で祭り囃子を吹けることは、私の密かな誇りです。能登の秋祭りでは、小学一年生の時から篠笛を担当してきました。中学入学と同時に金沢市に引っ越してからも、秋祭りには必ず能登に向いて、参加させてもらっています。

今、地方では過疎や高齢化による参加者の減少によって、伝統ある祭りですら存続の危機にあります。今こそ、私たち若い世代が積極的に地域の伝統行事に参加し、盛り上げていくことが求められています。そして、それは若者にとっても大きなメリットがあると思います。私は二つのメリットを考えてみました。

一つ目は、地域行事に参加することで多くの出会いがあるということです。普段は同年代の気の合う人とだけ付き合っていたらいいかもしれません。しかし、大人になって社会に出れば、様々な世代や価値観を持った人たちと協力していく必要があります。私の場合、自由参加の祭りの練習とはいえ、不真面目な態度でいたり、礼儀がなっていないと、壮年団や青年団の人にひどく叱られました。でも、こうしたことはこれから社会に出ても役立つ貴重な経験だと思っています。

二つ目は、その地域をより深く知ることができるということです。これによって、自分の住む地域に愛着がわき、伝統を守り、受け継ぎたいという気持ちが芽生えます。能登地区は著しい少子高齢化という問題を抱えています。実際に私の町でも、同じ学年の女子は一人もいませんでした。そんな時、秋祭りのお知らせが来ました。祭りの一ヶ月以上前から、毎晩公民館に集まり、練習するのです。一人ぼっちという思いが強く、当時の私は行きたくありませんでした。が、祭りの当日はご馳走が振る舞われ、ご祝儀ももらえると聞き、私はその魅力的なご褒美に惹かれて参加することを決心したのでした。いざ参加してみると、話したこともなかった上級生や同い年の男子と徐々に打ち解け、冗談を言い合ったり笑えるようになりました。また、顔も知らなかった町内の大人たちから篠笛の吹き方を教わりながら、自分の住む町にどんな職業のどんな人がいるのかを知りました。「なんで秋祭り

に獅子舞するがん。」とある大人に尋ねると、私たちの地域では、秋にも収穫に感謝して獅子舞をしてきたのだと教えてくれました。また、町にある古墳にまつわるちよつと不思議で怖い話など、身近なところが舞台だからこそ胸を躍らせて聞き入りました。秋祭りの本番を迎えるころには、私はすっかりこの町の一員として溶け込んでいたのです。小学校の六年間篠笛を吹き続け、町内のたくさんの人と触れあい、町のいろいろな出来事を知った私は、楽しく有意義な時を過ごすことができました。私はここで培った人との絆をずっと大切にしたいと思います。

最近では、忙しいから、面倒だからと、地域の行事に参加しない人も増えているそうです。休みの日まで町の行事に駆り出されるのは嫌だと思っているのでしょうか。でも、もう少し広い心で考えてみてほしいのです。長い歴史の中で受け継がれてきた伝統行事に、幼い頃あなただけから聞かせてもらった記憶はありませんか。忙しい私たちは、昔話なんて語る暇も聞く暇もないというのは、あまりに寂しいと思います。自分たちのルーツを忘れず、次の世代に繋いでいくこともまた、

さあ、もうすぐ能登の友達から連絡が来る頃です。今年もお囃子を奏でながら、懐かしい人たちの顔を見に行ってきます。





「ドナー」・・・臓器・組織の移植で、臓器や組織の提供者。私には幼なじみがいる。私の生まれて初めてできた友達、といっても過言ではないくらいの大親友だ。

しかし、彼女は今、ある病気と闘っている。そして、その病気を治すには、たくさん人の「思いやり」が必要なのだ。

「臓器移植のためのドナー」これが、今彼女を助けてあげられる方法である。ずっと一緒にいてけんかもいっぱいした。たくさん話をしたり、遊んだりもした。これだけの時間を共有して、彼女のことならなんでもわかっているつもりだった。けれど、私は今、彼女のために何もしてあげられない。

そこでだ。私は、私にもできる「思いやりの方法」がないか調べてみた。「臓器提供意思表示カード。」これが、彼女のように世界中にいるドナーを探している人たちのためにしてあげられることだと思う。

「臓器提供意思表示カード」は私たちの身近なところでいうと、郵便局やコンビニエンスストアなどに置かれている、臓器移植に対する自分の意思を表示するためのカードである。これに記入し、常に持ち歩くことで、自分にもしものことがあったとき、世界中の生死の間で闘っている人たちに、生きる道を与えられるかもしれないのだ。心臓移植後の生存率は、一年後で九十五パーセント、五年後で七十六パーセントと高く、生活面でもまったく健康、ほぼ健康は七十七パーセントと移植が成功すれば、普通の生活に戻れるそうだ。

ドナーになっても自分にはデメリットしかない。脳死なんて、死んだことにはならない、と思う人もいるかもしれない。確かにメリットはないのかもしれない。しかし、自分が死んだ後にも、誰かの命を救えると考えてみてはどうだろうか。また、脳死判定を何度も行っただけで移植をするのだから、いくら臓器が生きているとはいえず、体を動かすことはできないだろう。自分では使うことのできない生きている臓器をまた他の人の体の中で使えるようになるかもしれないのだ。

しかし、この意見には深く考えなければいけないことがある。それ

は家族の存在だ。臓器提供には必ず家族の同意が必要となる。「もし万が一の時提供してほしい」などといった私に、家族は戸惑った表情をした。当然かもしれない。けれど、とことん話をして家族とこのことに向きあっていきたい。

今も彼女は、体に機械をつけて、提供者、ドナーを待っている。彼女の家族もまた、緊急時に備え、彼女の体についている機械を扱うための資格を取ったそうだ。彼女の周りの人が、彼女のことを想い、いろいろ「思いやりの方法」を実践している。千羽鶴を折ったり、ビデオを送ったり、手紙を書いたりもした。どれも彼女はすごく喜んでくれた。そうしたみんなの思いやりが、病気に勝つための彼女の頑張る源になってくれればと思う。辛さや痛みを分かってくれ、あげることではできないけれど、意思表示カードを書くことや、募金活動をするのは私たちにもできることだ。決して一人で闘っているのではない、と彼女に伝えたい。

「臓器移植」という言葉。こんな身近になると、不安で仕方がない。正直なところ何もできない自分がとても歯がゆい。だからこそ自分の体を大切にして、自分が死んだ後にも誰かを助けられるような存在になりたい。これを聞いてくれたすべての人がそう思うことは難しいかもしれない。けれどこのことから目を背けてはいけない。今、私たちにできる「思いやりの方法」とは何か。答えがあるものではない。しかし、考えることで何か変わるかもしれない。だから、今日も私は考えてみる。





ピアニストになりたい。

幼いころから胸に抱き続けた、私の大切な夢です。

皆さんには夢がありますか。それはどんな夢ですか。大人の皆さんは、夢を叶えることができましたか。そして、新たな夢はできましたか。

私は、二歳から音楽教室に通っています。音楽がもっている、人を感動させる力、癒す力に、私もいつも力をもらっています。小学生になり、コンクールにも挑戦するようになりました。少しずつですが、着実に入賞もできるようになりました。中学校の入学時に、もっと上手になりたい一心で、長年お世話になった先生から、コンクール実績のある先生に、変わることを決めました。すぐに、コンクールに向けたレッスンが始まったのですが、今までと全く違う指導にとまどうことも多く、なかなか思う様に、曲を仕上げるできませんでした。そんな中、コンクールの二週間前に体調をくずし、練習ができない日が続きました。ピアノは一日練習しないと、すぐに指が動かなくなるので、この時期には大変な痛みとなりました。結果、当日は満足のいく演奏をすることが、できませんでした。

この結果を受けて、先生から話がありました。音大に向けて、レベルの高いピアノを続けていくなら、ピアノ以外を一切排除して、一日五時間以上の練習が必要だ、と言われました。今のままではピアニストにはなれない、という現実を、つきつけられました。中学一年生の私には、「全てを捨てて、ピアノにささげるか」「夢をあきらめるか」の選択は、辛く苦しいものでした。悩みぬいて出した答えは、音大には行かずに、上手くなることを目指して、ピアノを続けるという道でした。

この選択をしてから、コンクールに出ることをやめ、基礎練習から、しっかりとやり直すことにしました。基礎練習は地味で苦しいものでした。上手くなるという目的はあるものの、結果の見えるコンクールとは違い、何を最終目標にすればよいのか、分からなくなることもありました。

りました。

そんな時、友達のお母さんが働いている施設で、ピアノをひいてほしい、と言ってもらいました。知的障害のある方の施設で、行ってみると、大きな声を出したり、立ち歩いたり、とてもピアノをきいてもらえるとは、思いませんでした。いつもとは、違う緊張の中ひき始めると、今まで騒いでいた皆さんがこっちを見て、一生懸命きいてくれたのです。すごくうれしくて、感動しました。やっぱり、音楽には人を幸せにする力がある、と改めて強く感じるようになりました。

この日以降、気持ちが楽になり、練習にも身が入るようになりました。自分は音楽が大好きだから、ピアノを弾くんだ、と思うことができました。今も夏休みや冬休みには、施設に行つて、ピアノをきいてもらっています。「兎おいし彼の山 小鮒つりし彼の川」このように最後は、ふるさとを、一緒に歌っています。すると、皆さんが笑顔になって、その場が、とてもあたたかい空気に包まれます。

私は、残念ながら、世界を飛び回るピアニストになることは、できません。沢山の友達に、音楽の素晴らしさを、届けることはできません。しかし、身近な友達に、小さな音楽を届けることは、出来ると思います。私の夢は、変わったのかもしれませんが、けれど、決して後悔の残る選択をしたとは、思っています。今の私ができることを、一杯して、これからも成長していきたいです。そして、私自身の新たな夢を、叶えていきたいです。





「いたい！ やめてよ！」

祖父から、生まれて初めて、たたかれたのです。そこに手加減はありません。私は怖くなりました。そして許せませんでした。

祖父は認知症でした。私が、小学校高学年の頃、病が進み、とうとう私のことさえ分からなくなったのです。

元気なころの祖父の笑顔、大好きでした。農作業に精を出し、真っ黒に日に焼けた祖父。祖父のTシャツの草と汗のにおい。忘れられません。

おじいちゃん、いつも、バス停で、私の帰りを待っていてくれたね。そして、帰ったらすぐに、おじいちゃんの膝の上に座って、たくさん話をしたね。病気が進み、家族のことが分からなくなってきた頃、寝ている時でも「絢音、絢音」って、名前を呼んでくれたね。

それなのに、わかってあげられませんでした。祖父の想い。祖父のつらさ。あの日、突然、部屋に入ってきた祖父。「出て行って」と言った私に突然怒り始め、たたいたのです。

以来、祖父がそばに来るたびに、「あっち行って」と突き放し、誰もいない部屋で、独り、しゃべる祖父を「ばかじゃない」と思っていました。同じ空間で息をするのさえ、嫌でした。誰よりも私をかわいがってくれたのに。

私が中学生になった頃、祖父の病気がさらに悪化して、入院しました。みるみるやせて目を開けることも減りました。暴れないように、手袋をはめられ、ベルトでしばられている様子、シヨックで見えられませんでした。そして、お見舞いに行くたびに、やせていきとにかくこわかったです。一方で、祖父に「謝らない」と思い始めていました。でも、謝れませんでした。お見舞いも行かなくなりました。

今年の五月のある日、担任の先生から、「おじいさんの体調が悪くなったようです。帰りましょう」と聞かされました。手がぶるぶる震え、友達に、帰る用意を手伝ってもらいながら、「体調が悪くなっただけ」と、なんとか気持ち落ち着かせました。祖父は、病室で独り

静かに亡くなりました。「ばかだ。ばかだ。最低だ」と自分を責めました。もう、謝りたくても、謝れなくなりました。

私は吹奏楽部でフルートを吹いています。この夏は、コンクールに向け、猛練習の毎日でした。でも、パート練習で思い通りの演奏ができず悩んでいました。後輩への指導がうまくいかないのです。

「どうにかしんと。だけど、どうやったら。」アドバイスをしても、しても、空回りし、焦る毎日。そんな時、気づいたのです。私の後輩に対するふるまいは、以前、祖父の気持ちを考えず、「あっちが悪い」と冷たい態度をとっていた頃のものと同じではないかと。

後輩の思いを考えようと思わず、表面的な言動からわかった気になり、私の考えをおしつけていたのです。

以来、同じ曲を演奏する仲間である以上、お互いの心が通じ合うことが一番大事と考え、時には、先輩後輩の垣根を越えてとことん話し合うようになりました。そして、今も、相手の思いをくみ取ろうと努力しています。

今の私の目標は、「亡くなった祖父に恥じない人間になる」ということです。

おじいちゃん、見ていてください。おじいちゃんの孫で本当に良かったよ。





奨励賞 平和な未来を築くために

加賀市立東和中学校 三年 毛利 柚葉

「平和になってほしい。」誰もが思うことだと思います。しかし、平和のために、私たちに何ができるのでしょうか。広島での平和学習は、私にとってそれを考えるきっかけとなりました。

一九四五年八月六日、一発の原子爆弾が、ある一人の少女の肌を焼き尽くしました。その少女の名前は、池田精子さん。池田さんは七十一年の時を経てなお、生々しく、当時のことを私たちに話してくださいました。なんとか一命はとりとめたものの、顔中がケロイドというやけどのあとで赤く腫れあがり、彼女の大切な、大切な青春時代は、奪われてしまいました。しかし、池田さんは私たちにこう語ってくださいました。「憎しみのある所に絶対平和はない」と。みなさんだったら、同じように思えるでしょうか。私は、「憎しみのある所に絶対平和はない」という言葉の意味を、深く考えてみました。池田さんの思いをすべて分かったとは思いません。しかし、「自分の大切なものを奪った戦争を憎んでいるだけでは何も変わらないし、良い方向にも進まない」と考えたのだと思いました。戦争でつらい思いをしたのは、日本人だけではありません。つまり、池田さんは、「日本と世界、人と人。お互いのことを考えながら、前に進んでいこう」ということを、伝えてくれたのだと思いました。

私は広島での平和学習を通じ、身近な人の戦争体験についても、もっとよく知りたいと思いました。そこで、祖母に聞いてみることにしました。

戦争中満州に住んでいた祖父は、敗戦を受けて日本に引き揚げてきました。満州では不自由なく生活していましたが、日本に帰ってきてから生活は一変したそうです。着るもの、食べるものがなかったうえに、満州から帰ってきたばかりの幼い祖父は言葉を十分に理解できず、学校に行くのもつらかったそうです。そのうえ、「満州から帰ってきた人」とバカにされて、つらい思いをしたということも、話してくれました。戦後の助け合っっていかなければならないときに、日本人同士でもこのようなことがあったことに驚きました。また、祖母は、

父が、祖母が生まれる前に戦争に行ってしまったため、父の顔を写真で見ることがないそうです。私は、祖父母の話聞いて、身近にも戦争でつらい思いをした人がいたこと、戦争という中では、他人を思いやる気持ちが失われてしまうことにあらためて気づきました。

世界ではいまだ争いがたえません。平和な未来を築くために、私たちにできることは何でしょうか。それは、「お互いのことを考える力を身につけること」ではないかと思えます。日本では七十一年間、外国との戦争はありません。しかし、憎しみがなく平和だとは言えない状況であると思います。日ごろから、自分が嫌な思いをしたときさえも「なぜ、相手はそんなことを言ったのだろう、したのだろう。本当は、どう考えているのだろう」と思いを巡らせ、どうすればお互いが納得できるのか考えて行動することが平和の構築に向けて、私たちに必要とされている力だと思えます。私は、普段の生活の中でも相手は相手が悪いと思ってしまいがちです。例えば、友達とケンカしたときにはあったのでは？と考えると、普段とは少し違う考え方を持つことを心がけていきたいです。小さな思いやりの積み重ねが、平和への第一歩なのです。





小学生の時に夢見ていたサッカー日本代表になること、そして海外クラブチームのACミランの選手になること。それを叶えたのはみなさんもよく知っている本田圭佑選手です。ある日「夢を叶える」という番組で見た本田選手に、同じサッカーをしている僕は強い衝撃を受けました。本田選手はゴールポストに三本連続でボールをあてるという練習をしているそうですが、そんな練習でも「惜しいだけじゃ試合で通用しない。結果を残すことが大切だ。」とおっしゃいました。夢を叶えるまでの道のりにも血のにじむような努力があったと思います。口で言うことは簡単ですが、実際に試合に通用するように結果を残すところまで高めるのは「夢」のまま終わらせない何かが必要だと思います。

もっと身近なところにも僕にいろいろと考えさせてくれる人がいます。それは「父」です。僕の父は消防士をしています。僕が寝ている間も人々の命を守るために頑張っています。そんな父が「自分の使命は人の命と、その財産をまもることだ。」と言っていました。父は自分の職業に自分が与えられた重大な責任を自覚して日々頑張っているのだなと感じました。

また、七月に行われた「わく・ワーク職場体験」で、僕はどんたくアステイード店で体験をさせていただきました。そこでは、店の表に立つ人と裏で袋詰めなどをする人に分かれて作業をしていました。僕は、表に出る仕事をしたかったのですが、裏でする仕事の担当になりました。主に、袋詰めをしたのですが、少し表での仕事もさせていただきました。僕は表の仕事がもっとしたいと思っていたので裏の仕事が少し苦痛になりました。このような状態のまま最終日となりました。最終日にはインタビューをしようと考えていたので裏の仕事をしている従業員さんに質問しました。「裏の仕事は接客もないし、同じ作業ばかりしていて辛いことが多いと思いますが、大切なことは何ですか。」と聞くと

「確かに辛いことが多いけど、こんな作業をする人がいなくなれば、

商品にならないし、お客さんの笑顔も減るから、やるしかないんだよ。」と答えてくださいました。

そこで、父が言った「使命」という言葉が気になりました。「使命」それは与えられた重大な務め、責任を持って果たさなければならぬ任務のことです。これらのことから、「夢」を叶え、それに責任を負えるような人になりたいと思うようになりました。ただ自分のためだけでなく、人のために自分の役割というものを考えられる人になりたいです。

他に、僕は犬を飼っているのですが、とてもかわいくて人なつこい犬です。大好きな犬と遊んでいるし、世話もしています。そんな犬を僕は何かでも守りたいと思っています。このように何かを愛したり、大切にしたりすることも「使命」につながっているように感じます。

僕は丈夫に生まれたこの身体を使って、誰かのためになることがしたいです。「使命」は夢や人の役に立つこと、誰かを守ることなどにつながります。

今の僕ははつきりとした「夢」が見えていません。しかし、今所属しているサッカーチームで貢献できるように練習に励んでいます。「夢」をつかみ、それに「使命」を持って頑張ることに向かって進んでいます。





「早く穂乃佳のセーラー服姿が見たいね」「じゃあ、穂乃佳が中学生になるまで元気で頑張ってね、約束!」
幼い頃にした祖母との約束。この約束が守られることは、ありませんでした。

保育園の運動会、登下校、外出、私は何をすることも祖母と一緒にした。両親が離婚してからは、祖母と二人でいる時間が増えました。足が不自由な祖母でしたが、それまで母がしていた家事を全てこなし、私の面倒もみてくれました。でも、私は恥ずかしくて素直に「ありがとう」と言えずにいました。

私が小学五年生になって間もなく、元気だった祖母に治すことの難しい病気が見つかりました。祖母は入院し、料理も掃除も洗濯も自分たちでなくてはなりません。改めて祖母の生きてきてくれたこと、の大きさに気づき、今度こそ「ありがとう」を伝えようと思いました。

祖母のお見舞に行くと、強い薬を打たれていた祖母は人が変わったようでした。「家に帰りたい。こんな生活もう嫌だ」「穂乃佳家に帰らせて」日に日に変わっていく祖母の姿。私はその姿をつらくて見えていられませんでした。

あの優しかったおばあちゃんはどこにいったんだろう。いつしか私は、祖母の姿を見るのがこわくて、お見舞に行けなくなってしまいました。そして、ついには祖母が亡くなるその瞬間さえも立ち会うことができなかったのです。祖母が亡くなった時、私は小学六年生でした。まだ何も伝えられていないのに。中学生になるまで元気でいるって約束したのに。涙とともに色々な思いがあふれてきます。それと同時に「なんで伝えなかったんだ」「今までに伝えるチャンスは何度もあったはずなのに」「最低だ」と何度も自分を責めました。

「ありがとう」たった五文字も伝えられず、私は大切な人を失ってしまいました。残ったものは「あの時ちゃんと伝えていけば」「あの時しっかり向き合っていれば」と後悔ばかり。きっと、この後悔は一生消えないでしょう。

残った祖母の携帯には、私の小学校の入学式や七五三の時の写真がありました。一人じゃなにもできない私のために、いつも傍にいてくれた祖母。泣いている私をいつもなぐさめてくれた祖母。たくさんのことを思い出します。祖母は私のためにいろいろなことをしてきてくれました。それなのに私は何も恩返しができませんでした。恩返しどころか感謝さえも伝えることができなかったのです。

今、私ができることは、これからの生き方を変えること。私が過去にした大きな失敗はもうやり直すことはできません。しかし、過去の失敗をくり返さないようにすることはできます。

私は修学旅行のお土産や、祖母の好物をもらうたびに仏壇にお供えしています。おばあちゃんに感謝を伝えることはできなかったけど、せめて仏壇に手を合わせることで感謝を伝えていこうと思っています。

私はもう二度と同じ後悔はしたくありません。私に今できることは、素直に相手に自分の思いを伝えること。みなさんは大切な人に思いを伝えることができますか。恥ずかしいから、面倒くさいからといって思いを伝えないでいたら、一生消えない大きな後悔をします。後悔をしないためにも自分の思いを伝えてください。思いを伝えることで相手も喜んでくれるし、自分もうれしい気持ちになります。

二度と同じ失敗をくり返さないよう、同じ後悔をしないよう、私は今伝えることができる大切な人に思いを伝えていきます。

そして、天国にいるおばあちゃん「おばあちゃん、ありがとう」「穂乃佳は変わったよ」と言えるように正々堂々と生きていきます。





奨励賞 あと一步、もう一步

石川県立金沢錦丘中学校 三年 玉川 未琉

「あと一步努力すれば。」「あと一步の勇気があれば。」と思ったことはありませんか。

私はバレーボール部に所属しています。初めての大会では、先輩や友達に教えてもらいながら良い結果を残すことができました。私たちはまだまだ上を目指せるそう思っていました。しかし、共に頑張ってきたはずの仲間同士の個性がぶつかり合い、次第にうまくいかなくなってきました。私たちはミーティングを開きました。何度も、何度も。けれど、メンバー同士が本音で話すことができず、私もあと一步の勇気を持っていないのです。もっと自分から声かけをしていたら。お互いの気持ちを伝える橋渡しができていたら。そんな後悔が私の中に渦巻いていました。ミーティングに明け暮れ、技術が向上するはずもなく、みんなの気持ちもバラバラで迎えた春の大会は、満足のいく結果ではありませんでした。顧問の先生に「勝負にも負け、気持ちでも負け、この試合は負けの負けだ。」と言われ、悔しく、情けなくなりました。その後、練習試合をする中で他校との練習量や質の違いを実感しながら話を聞いたり、もっと積極的に声かけをしたりする中で、これまでの自分たちに足りなかった、チームとして一つになって闘いたいという気持ちが強くなりました。他のチームの先生からも「錦のチームは粘り強くなったね。」と言われ、私たちの中で少しずつ自信に変わっていくのを感じました。そうして迎えた最後の大会では、勝負には負けたのですが、気持ちでは負けませんでした。常に声を掛け合うことで、一人一人の思いをつなぐプレイができました。そして、みんなで一点をとる喜びを感じ、「負けの負け」ではなく「負けの勝ち」の試合ができたと思います。私にとって、この経験はとても価値のあるものとなったのです。

また、私は二年生のときに、充実した学校生活にしたいと思い、生徒会の役員になりました。そのときはとにかく「頑張ろう。」という気持ちでいっぱいでした。しかし、決められた活動には自分から行動

できていたのですが、新たなことを生み出すとるときは周りに遠慮してしまい、自分の意見が言えませんでした。あと一步積極的に行動できていたら。もっと明確に自分の考えを伝えられたら。そんな後悔を残し、半年が過ぎてしまいました。そのままでは納得がいかず、三年になったこの春、私はクラスの委員長に立候補しました。自分が今どんなことを提案できるのか、学年や学級に足りないものは何か、現状を見ながら対策を考え、それをみんなに発信できています。二年生の頃にはできなかった後悔を次に活かし、新しい自分、成長した自分を見つけることができつつあります。そして、この経験を踏まえて、後期はもう一度生徒会役員に立候補し、自分を試してみようと思っています。

後悔したことをそのままにせずにさらにチャレンジしよう、弱い自分に負けたくないという強い思いが今の私を作っています。あと一步足りない部分をもう一步努力することで、自分の自信が変わり、より高みを目指していけるのではないのでしょうか。

歴史や過去に「もし」はありません。そして、未来に「絶対」はありません。つまり、後悔した過去は変えられませんが、未来は自分の意志で変えることができるのです。できなかったことをそのままにするのは、もつたいないと思いませんか。私は少しでも前進するために、「あと一步」という後悔を「もう一步」という勇気と自信に変えて、これからも自分を磨き続けていきたいと思っています。





「あなたは今、幸せですか？」そう日本の若者に問いかけたのは、今年四月に日本を訪れた南米ウルグアイ元大統領ホセ・ムヒカさんです。私は、この質問にすぐには答えられませんでした。なぜなら、幸せについて深く考えたことがなかったからです。またムヒカさんの次の言葉で私の心は、さらに大きく揺れました。

「人生は一度きりで、瞬く間に過ぎていきます。何のために時間を使うのか？ 自分に問いかけるべきなのです。」私は、ムヒカさんの言葉を自分の心に問いかけてみました。

私は、小学校のころから演劇をやっています。演劇を始めたのは、小学校でもらったサークルの募集の紙がきっかけでした。最初は演劇にあまり興味がなかったのですが、年々演技をやっていくうちに演技の魅力にとりつかれていきました。今年で、演劇を始めて五年目になります。勉強と部活動をしながらか、演劇の練習に行っています。演技には、主役や脇役など、さまざまな役があります。時には、演技でカラスになったりする事もありました。演技を始めたばかりで、カラスの役をもらってうれしかったのですが、それと同時に「カラスって、ただ空を飛んでいるだけなのに、どうやって演技したらいいの？」と思った時もありました。しかし台本を読むうち、動物にも植物にも、その役になりきる気持ちや喜怒哀楽があることに気付きました。私は演技をやってきて、自分ではない他人になるという時間や、それを見て楽しんでくれる方達の笑顔を見ている時がとても楽しいです。演技を練習している時間は真剣になり、演技力が磨かれ本当に充実した時間です。

また、私には演技指導をして下さる先生がいます。先生が本番前に「今まで一生懸命練習してきた皆さんなら大丈夫です。誰かがミスをしてフォロワーしていきましょ。」と、おっしゃったことがあります。これは、仲間を信じて自分なりの演技をすることだと思いました。練習に大切な時間を使ってくれた、たくさんの仲間がいてくれたからこそ、本番を成功させることが出来たのだと思います。このこと

に気付いたとき、仲間たちに感謝の気持ちでいっぱいになりました。感謝していると、身の回りの事も考えるようになりました。私は、友人や家族と過ごす時間が、当たり前の事だと思っていたのです。しかし、生まれてから今までの事を考えると、大きな病気やけがもなく日々過ごせる時間、たくさんの友人に囲まれている時間、学校に通え勉強できる時間、家族に愛されている時間、その全ての時間が、私にとっての幸せなのかもしれないと思うようになりました。ムヒカさんに問われるまで、考えたことがなかったのです。

このように考えていくと、私にとっての本当の幸せとは、特別なことをしている時間ではなく、大好きな演劇をしているときや、なにげない日常生活を送っているときだと感じるようになります。幸せとは、とても近くにあるのに気付きにくいものです。気付きにくいものだから、日々のささやかなことに感謝することが大切です。そのことを忘れずに、私を成長させてくれる演劇をこれからも続けていきたいです。瞬く間に過ぎていく人生、あなたはどんな幸せを見つけますか。





割れない、と思っていたガラスが、ある日突然割れました。

そのガラスが割れたことにより、僕達家族の空気はよどみ、真つ暗になったことはいうまでもありません。

父は元々、余計なことはしゃべらない人でしたが、この時は、さらに肩を落とし、ほとんどしゃべりませんでした。

そのガラスとは、僕の祖父のことです。

祖父は亡くなる二年ほど前から、肺がんにかかり、入院生活を始めていました。時々、体調を崩し、治療を受けていました。

そんな入院生活を始めてから一年半が過ぎ、僕達家族は数ヶ月ぶりに祖父のお見舞いに行きました。

そこで見た祖父の姿に驚きました。手は細くなり、手の甲や指の骨がくつきり見え、目はくぼみ、顔から頭骸骨の形が浮き出て見えるほどやせていました。そして、息は浅く、ゆっくりと息を吐き出している。いつ息が止まってもおかしくない状態で、入院する前とは比べものにならないほど衰弱していました。祖母が呼びかけたり、手を握ったりしても、弱々しい反応ばかりでした。

だから、僕も、

「じいちゃん」

と声をかけました。

すると、祖父は、口を動かさず、僕に向かって、必死に何かを伝えようとしていました。

僕は思わず手を握り、もう一度、

「じいちゃん、拓哉だよ、分かる？ 何言いたいん？」

とつさに握っていた手に力を込め、聞くと、祖父は再び口を動かしてくれなかったものの、残念ながら、聞きとれませんでした。

「じいちゃん、点滴痛いかもしれないけどがんばって。元気になったら一緒に温泉行こ。」と、僕は言いました。すると祖父は、瞳をゆくり動かし、僕の方に小さくうなずきました。

僕は話している間中、ずっと手を握っていました。

祖父は半年後、静かに息をひきとりました。

ガラスは一見すると、とても硬い物に見えます。しかし、一旦ヒビが入ってしまうと、いとも簡単に崩れてしまう、脆いものです。「あたりまえ」も同じです。僕達があたりまえと思っていることは、実はそうではありません。僕達が日々送っている、家族との平和な日々も、誰かが事故にあつたり、病気で入院することによって、割れたガラスのように崩れてしまいます。

しかし、僕達はあまりそれに気付くことはありません。なぜなら、僕達の「あたりまえ」の日々は、どこかで事故が起きて、無事に続いていくからです。僕もそうでした。

ある日、僕の小さなガラスが割れました。水でぬれた廊下を歩いている時、すべて転び、腰を強く打ちました。痛みが三週間ほど続いたので、病院で見てもらったところ、第五腰つい骨折ということが分かりました。腰にコルセットを巻き、激しい運動は控え、一々体勢に気を付けなければならぬので、大変でした。

その時、僕は、いつも普通に走ったり、寝そべったりできた、「あたりまえ」の体が、実は幸せだったんだなと気付きました。

今では、激しい運動こそ、止められているものの、普通に動いたり、寝そべったりできるようになりました。

皆さんは、「あたりまえ」を幸せだと感じていますか。

僕は祖父の死や、自分のけがにより、「あたりまえ」を幸せだと感じています。

「あたりまえ」は脆いものです。

だからこそ、「あたりまえ」である日々や、関わってくれる全ての人に、感謝しようではありませんか。





私達の住む世界にはたくさんの方がいます。男の人、女の子、運動が好きで嫌いな人、勉強が得意な人、苦手な人。そしてそんなたくさんの方の中には障害と戦い、大変な思いをしている方がいます。しかし、今の世界はそんな障害を持つ人を理解している人が少ないと私は感じています。

私の大切な人は、LD (Learning Disabilities)、日本語では、「学習障害」という障害を持っています。ここでは仮にAさんと呼びましょう。LDとは、知的な遅れはないのに、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなどの基本的な学習能力のうち、一つか二つ以上の能力を習得するのが困難な状態をいいます。

Aさんは読み書きに困難を示しています。教科書をスラスラ読むことができません。文字を見てすぐにその音が思い浮かばないのです。音読は読むのではなく、文章を暗記して読んでいるフリをしています。漢字は何十回書いても覚えることができません。文字の細かい部分にまで注意を向けられず、形を正確に捉えられないのです。線が多かったり少なかったり、点の位置が違っていたりします。それでもAさんは少しでもみんなに近づこうと日々努力をしています。一日に四時間以上机に向かっていてもありません。今の私よりも勉強しているのではないかと、そう思う日も少なくありません。しかし、それでもやはり覚えられないことが多いのです。

LDについて理解しようとする以前は、どうしてできないのか、勉強をしているフリをして本当は怠けているのではないかと、そんな風に思ってしまうこともありましたが。しかしLDを知っていくにつれ、私はAさんに対して偏見を持つていたことに気付きました。涙を流しながら、頑張っているAさんを見続けているうちに、LDについてもっと学びたい、そう思うようになりました。LDを学ぶうちに、私を含め多くの人々がLDに偏見を持ち、理解していないことを知り、悲しくなりました。

エジソン、アインシュタイン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、トム・クルーズ、ステイブ・スピルバーグ、この偉人たちの共通点は何だと思えますか？ この五人は、Aさんと同じLDです。スピルバーグ氏を例にあげてみます。スピルバーグ氏が学生時代を過ごした

一九五〇年代は今より、LDに対する知識が十分ではありませんでした。教師には十分に勉強をしていないと思われ、友人には「うすのろ」というあだ名をつけられ、いじめられていたそうです。スピルバーグ氏は「自分の視点でしか物事を見られない子供は時に非情で、自分が何をしているのかすらわかっていない。今大人になって振り返ってみてそれを恨むことはないし、今となればそれもわかる。けれど、中学時代が一番つらかった」と語っています。Aさんも音読が上手に出来ないことで、そのまねをされてからかわれるそうです。そんな自分に劣等感を抱き、自ら人を遠ざけるようになっていきます。私たち中学生は偏見で物事を捉えやすく、考えなしのひとりで人を傷つけてしまいがちです。みんなと違うから馬鹿にする、遠ざける。悲しいことですが、実際に起きていることなのです。だけど、それは絶対に間違っているし、あってはいけないことです。以前の私なら、みんなと違う人を差別してしまう人間の一人だったかもしれません。だけどAさんのお陰で私は変わることができました。

私はLDのAさんの努力を知りました。そしてAさんが孤独を感じていることも知りました。障害を持っている人は孤独を感じている人が、多いのではないのでしょうか？ もしそうなら、私は手を差し伸べてあげたいです。障害を持った人たちと共に過ごす社会を創るには、まず相手の存在を認め、「理解したい、わかりたい」と、思っていることを真摯に伝え続けていくことが重要なのだと思います。多くの人々のこれまでの見方や考え方を考えることは難しいことです。しかし、Aさんを通して学んだ私の体験や思いを伝え、率先して異なる個性を持つ人たちと関わる姿勢を示し続けることで、少しずつ周囲の人たちの見方や考え方に変化を与えていきたいと思います。大切なAさんのために、私に何が出来るのか今後も考え続けていこうと思います。





皆さんは本を読むことが好きですか。光野中学校では、朝学習の十五分間に読書を取り入れていきます。私はその十五分間がとても楽しみです。本を読むことで、色々な方向から物事をとらえることができるとなり、自分の価値観が変わってくると思います。これまで出会ったたくさんのおかげで今の自分があるといってもいいと私は感じています。本は、単に知識や語彙を増やしてくれるだけではないのです。

中学生になると、自分の将来について悩みや不安を抱えている人は多いのではないのでしょうか。実際に私もその一人でした。思っていた以上に勉強と部活、自分の好きなこととのかね合いが難しく、思い悩んでいました。目の前の事、例えば宿題やテストなどは、将来、自分に必要だと分かっている、目をそむけたい、逃げたいと思うこともありました。そんな時、私は一冊の本に出会ったのです。その本は、私を大きく変えてくれました。今までの私が考えもしなかったことがたくさん書かれていて、悩んでいた私の心を支えてくれるように感じました。中でも、将来の夢について書かれていた部分に一番衝撃を受け、私は自分の夢について真剣に考え始めました。

『将来就きたい職業は、目標でしかない。目標を定めるには、その前に目的があるはず。目的とは、どんな人間になりたいか、そのために、自分の人生を何に使うと決めるのか、ということである。』私の心に響いたこの一節の意味を皆さんはどう考えますか。

難しく感じるかもしれませんが、とても簡単なことだと思います。例えば、医者になるといふ目標をもち、医者という職業に就くことで幸せを手に入れるよりも、たくさんの方の役に立つという目的のために医者になる、というふうには、就きたい職業を、人生の目的をかなえる一つの過程として考えるということです。そうすれば、他の職業に就いたとしても、その仕事が人の役に立つ仕事なら、目的が達成でき、幸せな人生を送れる、ということだと思います。

今までの私は、就きたい職業を将来の夢として考えていました。そ

の職業は、とても素敵な職業ですが、かなえられなかったことを考えると、周りの人に就きたい職業を聞かれても、無意識に、まだ決まっていな、と答えていました。しかし、本から学んだ、新しい視点でとらえることで、今までよりも、肩の力を抜いて夢というものを考えることができ、希望を持つことができるようになりました。私がこの一冊の本で変わったことを証明するために、今ここでためらうことなく、将来の夢について話したいと思います。私は、将来たくさん笑顔をつくりたいと思っています。直接人と関わることは、あまり得意ではないけれど、小さい頃から目指している、獣医師という職業なら、動物を通じてたくさんの方に笑顔になってもらえるのではないかと思っています。大変な仕事かもしれませんが、私は自分の人生を人の笑顔をつくることに使っていきたいです。

この本と出会ったことで、夢を持つことの大切さを私は学びました。本を読むことで、悩みが解消し、心が救われることはたくさんあります。私はこれからも、一冊一冊の本との出会いを大切にしながら、読書をしていこうと思います。

みなさんも是非、自分を変えてくれる本との出会いを見つけてみて下さい。





「挑戦。」この言葉は私にとって、今大きな意味を持っています。小学生の頃、もともと私は、発表することが好きでした。五年生のある日、授業中の発表で答えを間違えてしまった事がありました。

「あー、間違えとる。」

「そんな事も分からんがん？」

クスクスという笑い声。胸に刺さりました。

その日以来、発表することが怖くなってしまいました。

「もう発表なんてしたくない。」

その弱い心は対人関係のもち方も変えてしまい、常に相手の機嫌をうかがうようになりました。決して相手の言う事を否定せず、いつも無理してにこにここと笑っていました。

まるで檻に入れられているようでした。

中学生になって、私は芸術部に入部しました。そこである一人の先輩と出会いました。その先輩は、私達のちょっとした変化にも気が付き、明るく話しかけてくれました。おかげで安心できました。先輩の笑顔は、自然で輝いていました。後輩を導き前へと進んでいく姿がとても凛々しく見えました。

「私も先輩のように、自信を持った人になりたい。」

という思いが強くなりました。

次の部長を決めるとき、私に今までの弱い心が

「自分にできるのか。」

とささやきました。だけど、

「生まれ変わりたい。」

という強い思いから、

「部長をやりたいです。」

と言いました。部長になることが決まったとき、私の心はとても清々しく新しい事へのやる気と希望に満ちあふれました。

部長になってからの初めての活動は、スローガン幕作りでした。スローガン幕とは校舎に貼る、長さおよそ十メートルの文字やイラスト

を工夫した大作です。しかし、

「用事があるから。」

と言って帰る部員が多く、作業がなかなか進みません。部員が帰った後も一人で作業するようになりました。部長として、みんなを引っばつていかないといけないのに、部員の反感を買うことが怖くて一人でやっていました。

その頃、私の親友も卓球部の部長として、悩んでいました。けれど、彼女はみんなに声をかけるようにしていました。私は努力する前に、「どうせ言ってもだめだろう。」

とあきらめていた自分が恥ずかしくなりました。自分の力を信じ、前へと進んでいく親友の姿は、私があこがれた芸術部の先輩と重なって見えました。それから私は、部員全員に

「もっと協力して頑張ろう。」

と声をかけました。すると、参加する部員が増え、一生懸命筆を動かしてくれるようになりました。スローガン幕が完成。私は今まで味わったことのない大きな喜びと達成感を感じました。

私は、あこがれの先輩、悩みを聞いてくれた親友、そして何より私について来てくれた部員達の支えのおかげで、恐れずに挑戦することができました。また、挑戦し努力することによって得られる感動も味わいました。

私の挑戦はまだ始まったばかりです。

一つ一つの挑戦がなりたい自分へと続く階段一段一段なのでしょう。私は信じたのです。今、自分が上へと向かって少しずつ階段を登っていることを。そして、もつともつと進みたいです。





私には二つの家があります。一つは、本当の私の家。もう一つは、小さい頃から私をかわいがってくれた隣の人の家です。

私の住んでいる町は近所がとても仲がよいです。特に仲がよいのは、小さな頃から私の面倒をよく見てくれた隣に住んでいるママです。隣のママは大阪出身で明るくて面倒見のよい人です。そんなママの住んでいる隣の家は私の隠れ家でした。

姉とケンカした時や親とうまくいかなかった時、私は決まって泣きながら隣の家にいきます。隣のママは、私の話を聞いて一言何かを言った後に必ず、

「でもな、ちー、泣いたらアカン。泣いたら負けや。人生楽しんだもん勝ちやで。」と言います。

「人生楽しんだもん勝ち」。これは隣のママの口癖です。私が怒っている時や悲しんでいる時に、いつもこの言葉をかけてくれます。どんなこともおもしろおかしく話しているママは、本当に自分の人生を楽しんでいるのだと思います。

隣のママの言っているこの言葉は、どんなことにも言えることなのではないでしょうか。例えば、今自分のしているスポーツや勉強。楽しくないと思っっている人と、楽しいと思っっている人では、楽しんでしている人の方がよく勝てたり、成績がよかつたりするに決まっています。

三年の国語の授業で、こんな孔子の言葉を習いました。「これを知る者は、これを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず。」

この言葉は、何かについて詳しく知っっている人はそれを好きな人にはかなわない。それを好きな人はそれを楽しむ人にはかなわない、という意味です。あの有名な思想家・孔子もこんなことを言っっているのです。

人生までもを楽しんでいる隣のママはもはや最強なのではないでしょうか。

生きていく中で、嬉しいことや楽しいことしか起こらないということとはありません。生きていけば、つらいことや悲しいこと、勉強や人間関係に苦しむこともあると思います。そんな時は、人生を楽しむなんて思わなくてよいのです。たくさん悩み、たくさん相談することで、それを乗り越えた時、何かを学び、前とは違う新しい自分になれ

ると思います。

しかし、小さなことで怒ったり、自分の思い通りにいかなかったことを悔やみ続けるのはよくありません。そんな時こそ、前を向くことが大切です。過去は変えられません。その過去を受け止めるのはその人自身です。どうせなら、過去を悔やむより、その過去をばねにどうしていくかと考えた方が楽しくはないでしょうか。過去のことを考えるのか未来のことを考えるのかというだけで、日々の生活の楽しさが変わってくるのです。

「人生楽しんだもん勝ち」。私は、この言葉を意識して聞くようになったことで少し前向きになれたと思います。以前の私は、嫌なことがあると不機嫌な顔をして後ろ向きな言葉をよく言っていました。しかし、この言葉の意味を考えるようになってからは、ちょっとした嫌なことでもあまりひきずらないようになりました。そうすることで、日々の生活が楽しくなり、私や私の周りにも笑顔が増えました。性格を変えることはとても難しいです。しかし、考え方を変えることは性格を変えられることよりも何倍も簡単です。みんながこの考え方をすれば、憎しみから生まれる争いはなくなると思います。

人生は一度きりです。その人生をどう過ごすのかは自分次第です。楽しんで過ごすのか、つらかったことをひきずりつらいまま過ごすのか。いろんな生き方があると思います。でも私は、隣のママのように、一度しかない人生は楽しく過ごしたいです。そうするためには、どんなことも前向きにとらえ、笑顔でいることが大切だと思います。私はそんな人になりたいです。そして、私が小さな頃から言われている「人生楽しんだもん勝ち」という言葉を、次は私が誰かに伝えていきたいです。一度しかない人生を楽しむ人がもつと増えれば、みんなが楽しく笑顔のあふれる世界になっていくと思います。

私には、二つの家があります。一つは、私の家族がいる私の帰る場所。もう一つは、私を小さい頃からかわいがってくれた隣の人の家。どちらも私の大好きな暖かい家です。今日も私は、隣のママの家に行き、「ちー、泣いたらアカン。人生楽しんだもん勝ちやで。」という、毎回同じ言葉を聞きます。そして、私は、笑顔で家に帰るのです。





奨励賞 メディアが伝えるもの

加賀市立橋立中学校 三年 吉田 帆乃

今年四月、米軍関係者による殺人事件が沖縄で発生しました。テレビ・新聞・雑誌などで大きく取り上げられ、私たち日本人に衝撃を与えた出来事なのではないでしょうか。

この事件が引き金となり、米軍基地があることに對し、不満がより一層高まったのと、米軍兵に對し、怖い人というイメージを持ち日本から出て行ってほしいと思う人が多くなったように思われます。

犯罪行為は、決して許されるものではありません。確かに多くの人が思っているように米軍基地さえなければ、あんな悲惨な事件は起こらなかったのかもしれませんが、その上、これまでの事件を聞くと、米軍関係の全ての人が悪い人のように思えます。しかし、少なくとも、私が出会った米軍の人達はそうではありませんでした。

私はこの事件と、私が出会った三つの話から、考えたことを述べたいと思います。

昨年の夏、私は東京にある横田米軍基地へ行き、数日間ホームステイをしました。そこでは、軍の人は、家族と暮らしていて、私を映画やボウリングに連れて行ってくれたり、手料理を作ったりしてくれました。家族と離れ、一人でホームステイすることに、不安を抱えていた私は、その不安と寂しさを吹き飛ばすような温かさを感じました。

二つ目は、一昨年、カナダへ行った帰りの空港でのことです。私たちは、手続きのトラブルと空腹にみまわれ、大きなスーツケースを持ったまま、立ちすくんでいました。すると全身迷彩柄の服に身を包んだ人達と出会いそのうちの一人の男性が声をかけてくれました。そこで、いろいろな話をしていくうちに打ち解け合い、仲良くなりました。そして、

「While you guys are having dinner, I will watch your baggage.」
(君たちがご飯を食べている間、僕が荷物を見ておくよ)

と言って荷物を見てくれました。その心優しい軍人さんのおかげで、私たちはご飯を食べ、トラブルも無事に解決でき、旅を終えることができました。

三つめは、ヨルダンで港の設計の仕事をしている母の叔父が体験した話です。ヨルダンは頻繁に紛争が起こっている地域です。そのため、通常の生活でも、夜の外出を控えるなど、気をつけなければならぬことがあるそうです。

あるとき、より危険な地域で仕事をしなければならぬことがあって、そのときに、米軍の協力を得て、夜は米軍基地で寝泊まりさせてもらい、昼は米軍兵に守られながら仕事をしていったそうです。

「危険な場所だったけど、米軍さんのおかげで安心して仕事ができた。」と嬉しそうに話してくれました。

最近では、メディアを扱った文章や、メディアによって起こる問題について、学校で勉強することが多くなりました。メディアが伝えるものは、自分が知らない世界を知るきっかけにはなります。しかし、メディアがある事件を伝えるとき、その事実だけを人々に伝えるだけに終わらず、関係するいろいろなことに視点が移っていったり、頭を置いておくべきです。その結果、偏見のもとになる考えも生まれるように思います。もちろん一つの情報もとで、人々の中に多くの考えが生まれ、議論する機会が増え、より良い方向に社会が進むという可能性もあります。大切なのは一つの面から捉えるのではなく、いろいろな角度、いろいろな人の立場があり、それを知った上で考えることが必要だということです。

私は、米軍兵について、よい人だと言っているわけではありません。たまたま出会った体験から、物事は一つの方向から全てと思えないで、いろいろな部分や問題があると知ることが必要だと考えることができました。

皆さんはどのように考えられるでしょうか。





皆さんは、運動会で組体操をした経験はありますか。

私はある日、何気なく、ニュース番組を見ていました。その番組では、大人たちが今の教育や学校について討論をしていました。そんな中、一人の元教師の方の言葉が、とても心に刺さりました。

「私の娘は、小学校二年生まで、運動会のかげっこで、ずっと最下位だった。けれど、翌年は、障害物競走だからチャンスだと思い、一か月前から布団を被せて練習をした。すると本番で、二位になることができ、とても喜んでいた。」

そして、

「これが教育ということではないか。全部逃げるということを教えてしまったら、将来、何かの壁にぶつかった時、逃げることしかできない。越えられる壁は、先生や親と協力して、「越える」ということを教えるのが大事だ。」と熱く語っていました。私は、この話にとっても共感しました。なぜなら、私も以前、先生や家族と協力して一つの壁を乗り越えた経験があるからです。

私は、小学校六年生の時の運動会で、組体操をしました。運動がすごく苦手だったので組体操の練習が、嫌で嫌で仕方ありませんでした。授業に参加しなかったこともありました。でもそんな時、私が頑張ってみようと思えたのは、周りの人たちの支えがあったからです。練習に遅れて参加した時、ある友達が、声をかけてくれました。

「理子、大丈夫か。今までやったところを教えてあげるから、一緒にやってみよう。」

本当にうれしかったことを覚えています。

私に通っていた小学校では「七段ピラミッド」が伝統になっていました。私は一番下のみんなを支える役割でした。ピラミッドを練習している最中にも、私は一度だけ練習を休んだことがありました。その時、担任の先生が私の代わりをして下さいました。授業が終わった後に、

「一番下って、こんなに大変なんだね。でも理子にもきつとできると

思う。最後まで頑張ろう。」

その言葉があったからこそ、ピラミッドに、強い気持ちで挑むことができたと思います。本番当日の朝、お母さんが、

「小学校最後の運動会だから、一生懸命頑張っておいで。」

と、温かい言葉をかけてくれました。今考えると、ピラミッドが失敗して、万が一のことが起こってしまうかもしれないと思うと、きつと心配だったはずですが、それでも、私を送り出してくれたお母さんは、本当にすごいです。本番では、今までの練習の成果を全て出し切ることもできました。正直、いつ技がきまって、拍手がおきているのかさえ分かりませんでした。演技が終わった後に、大勢の方が涙し、拍手をしている姿を目にして、大きな達成感を感じることができました。

この経験から私は、壁を乗り越える大切さや、つらいときに手を差し伸べてくれる、友達、先生、家族がいることのありがたさを知ることができました。これが、元教師の方が話していた「教育」ということだと、私は考えます。私にとって組体操は高い壁であり、逃げ出したくなるものでしたが、たくさんの人の支えにより乗り越えることができました。

今日では、様々な課題があるとよく聞きます。しかし、そのような課題に出くわした時に、すぐに回避する方法を考えるのではなく、「乗り越える」という経験を大事にすべきではないでしょうか。私自身、中学生になり、部活動や友達関係、受験など、まだまだ悩み苦しむことがあります。けれど、そこでつらいと言って「逃げる」のではなく、「挑む」という選択をしたいです。乗り越えたその先に、想像もできないくらい達成感で満ちあふれた私の姿と、支えてくれるたくさんの人との喜びがあることを信じて。



現在は、グローバル化の進展や人工知能の飛躍的な進化など、これまで以上に加速度的に変化し、将来の予測が難しい社会と言えます。これからの時代を担う中学生の皆さんには、こうした社会の変化の中でも、伝統や文化なども抛り所として、広い視野を持ち志高く、未来を作り出していくために必要な力を身につけることが求められています。こうした中、皆さんが今回のように、日常や社会の出来事に関心を持ち、自ら課題を見つけ自分の考えを持つとともに、様々な意見に耳を傾けながら、多面的に物事を捉え、論理的に考えたことを自分の言葉で表現することは、とても大切なことだと思います。皆さんの発表を聴いて印象に残ったことを、三点お話しします。

一点目は「出会い」です。

学校生活の中で友達や先輩、先生との「出会い」、修学旅行や職場体験などにおいて様々な経験をしてきた方や地域の方との「出会い」、また、地域の伝統文化や本との「出会い」。これらをきっかけに、積極的に自分を見つめ、自分のこれからの生き方を考えていたことです。出会う場面はいろいろ、一度限りの方もいたかもしれませんが、皆さんの考え、生き方に大きな影響を与えてくれたことと思います。そんな一つ一つの出会いを今後も大切にしたいと感じました。

二点目は「ふれあい」です。

中学生の頃は、つい感情や衝動の赴くままに行動し、自分の弱さに自己嫌悪を感じることもあるでしょう。また、ちょっとしたことが発端となり、悩み苦しむこともあるでしょう。そんな時、身近にいる家族や友達との「ふれあい」が、いかに心を和ませてくれるか、いかに勇気づけられるか。また、これまで見えていなかったものが見えてきたり、新たに考えたりするなど、「ふれあい」を通して自らの課題に真剣に向き合っていた皆さんの思いを受け取ることができました。

三点目は「言葉」です。

他の人が聞けば何気ない「言葉」ではあるかもしれませんが、ある瞬間自分の心に響き、その「言葉」で前向きに取り組むことができた経験。また、相手に「言葉」で伝えることの難しさ、「言葉」を受け取る側の思い、「言葉」に出して伝えたいけれど伝えられないもどかしさ、伝えられなかった後悔。「言葉」一つ一つには、たくさん思いが詰まっており、皆さんはその「言葉」から数多くのことを学んできたのだと、強く感じました。そして、皆さんの主張が「言葉」となって、私たちにしっかりと伝わってきました。

本日の主張が皆さんの心を豊かにし、明日のより良い社会を築くための気づきとなり、さらに高い志を持って、それぞれの夢や希望の実現に向けて歩まれることを期待しています。

平成28年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会
石川県BBS連盟

4 日 時

平成28年9月24日（土）午後1時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容（日本語で発表すること）

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や提言など。

以上のうち、日頃考えていることや感じていることについて、自由な発想で飾り気ない自分自身の言葉でまとめたもの。

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名
優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

9 その他

- (1) 発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。
- (2) 最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 少年らしく新鮮で意欲的な主張であるか
- イ 主張の内容が明確で、論旨が一貫しているか
- ウ 主張の内容が共感と感動を与えるか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすいか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があるか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えるか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であるか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持時間を5分とし、持時間を超過した場合はその時間の長さに応じて減点をする。(5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。)

審 査 委 員

(1) 審査委員長 新 古 紀 子 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 下 出 博 明 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

木 村 静 夫 (石川県PTA連合会 副会長)

牧 野 哲 栄 (石川県少年団体協議会 副会長)

井 村 香 澄 (石川県小中学校長会 理事)

日 向 正 志 (石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第35回 加賀地区中学生意見発表大会」

主 催：加賀地区市町教育委員会

共 催：石川県健民運動推進本部

日 時：平成28年9月3日（土）13：30～

会 場：能美市根上総合文化会館

審査員：高橋 正英（小松教育事務所長）

石黒 和彦（加南地区教育委員会連絡協議会長）

中嶋 敏一（能美市教育長）

竹本 明彦（能美市学校教育研究会長）

西田 耕平（能美市立図書館長）

発表者（17名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
一生懸命が美しい	川北町立川北中学校	2	原田 恵実
小さな平和の輪	加賀市立山中中学校	3	角 日菜子
僕たちのできる国際交流	能美市立辰口中学校	2	北村 仁
私を変えたもの	能美市立寺井中学校	3	北野 優依
One for all.All for one. ～ラグビーが私を変えたもの～	能美市立根上中学校	2	竹田 真彩
平和な未来を築くために	加賀市立東和中学校	3	毛利 柚葉
メディアが伝えるもの	加賀市立橋立中学校	3	吉田 帆乃
その人の笑顔を思い浮かべて	能美市立寺井中学校	2	中野 雄太
私たちの伝統文化	小松市立南部中学校	3	道苗 凜々花
剣道のすばらしさ	能美市立辰口中学校	2	田方 沙奈
世代の壁	川北町立川北中学校	3	亀田 早彩
友達との関係	小松市立芦城中学校	2	浅蔵 彩生
危機に対応する“ちから”	加賀市立山代中学校	3	西出 千乃夢
逃げないこと	能美市立辰口中学校	3	中川 理子
国際都市加賀市へ	加賀市立山中中学校	3	櫻井 悠貴
身近な幸せ	能美市立根上中学校	3	越田 瑞生
恩師の言葉	加賀市立錦城中学校	3	坂野 小春

(2) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第26回 (平成28年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部
 共催 野々市市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会
 日時 平成28年8月28日 (日) 13:30～
 会場 野々市市情報交流館カメリア
 審査委員 堂坂 雅光 (野々市市教育委員会 教育長)
 永井 隆和 (河北郡市教育課程研究会 部長)
 川本 務 (白山市PTA連合会 運営幹事)
 菅田 峰行 (石川県金沢教育事務所 指導主事)
 芝田 信栄 (石川県青少年育成アドバイザー協会 副会長)

発表者 (18名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
共に住む世界	野々市市立野々市中学校	3	澤村 夏渚
人生楽しんだもん勝ち	かほく市立宇ノ気中学校	3	東 知南
事件の中の一人を	内灘町立内灘中学校	3	居村 苑
命の大切さ	白山市立光野中学校	3	平 一花
「あたりまえ」を「あたりまえ」にしない	白山市立笠間中学校	2	宮本 春菜
世界中の子どもたちへ	野々市市立布水中学校	3	小林 芽依
本当の道徳	白山市立白嶺中学校	3	杉浦 綸
その一言が差別となる	内灘町立内灘中学校	3	竹内 来実
無限の可能性	白山市立松任中学校	3	干場 玲
私の父	かほく市立高松中学校	3	間戸 奏恵
思いやりの方法	白山市立笠間中学校	3	鶴来 里衣菜
読書から学ぶこと	白山市立光野中学校	2	川上 結衣花
あの日の母の言葉	白山市立美川中学校	3	森田 楓香
いじめは誰が悪い	津幡町立津幡南中学校	3	加藤 真之
言葉の持つ力	かほく市立河北台中学校	3	今本 奈々子
一刻もはやく	野々市市立布水中学校	3	森 千愛美
大人になるってどういうこと	白山市立鳥越中学校	3	畑 華穂里
生きるということ	かほく市立宇ノ気中学校	3	糺地 花帆

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第69回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 平成28年8月28日（日）9：00～

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 二見 和男 NHKキャスター

市内中学校国語科担当教諭

発表者（27名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
友達	金沢市立医王山中学校	1	丸山 結莉子
目標に向かって	金沢市立北鳴中学校	3	齋藤 有芽
小さな幸せ	金沢市立浅野川中学校	3	角谷 有希奈
命のつながり～母親という存在～	金沢市立額中学校	3	杉浦 羽美
夢へと続く道	金沢市立森本中学校	3	中村 優花
十五歳のぼくが思うこと	金沢市立泉中学校	3	藤井 亮太郎
文化の違い	金沢市立内川中学校	3	中山 洋成
「普通」の定義	金沢市立芝原中学校	2	岡野 愛子
多数決のあり方について	北陸学院中学校	3	林 瑚子
プロから学んだこと ～テレビの裏側で見たもの～	金沢市立港中学校	3	田中 唯聖
一番の後悔	金沢市立小将町中学校	3	水野 朔良
ペットたちの行方	金沢市立金石中学校	3	喜多 智之
平和への思い	金沢市立野田中学校	3	坂爪 悠莉
学校へ行こう	金沢大学附属中学校	3	岩崎 芳也
ことば	金沢市立城南中学校	3	長谷川 涼加
あと一步、もう一步	県立金沢錦丘中学校	3	玉川 未琉
当たり前にある毎日	金沢市立高岡中学校	3	鳥木 優佳里
祭り囃子を受け継いで	金沢市立清泉中学校	3	當山 絢香
学校へ行き、学ぶことの大切さ	金沢市立緑中学校	3	吉野 吏紗
私の宝物一部活動から	金沢市立紫錦台中学校	3	林 真由子
命の重さ	金沢市立長田中学校	3	越野 芽吹
なりたい自分	金沢市立高尾台中学校	3	寺本 汐里
「人とかかわる」ということ	金沢市立西南部中学校	3	小田 航士
なぜ人間は壁をつくるのか？	金沢市立鳴和中学校	3	深澤 綾乃
マナー	金沢市立犀生中学校	3	辰野 由依
一票を“つなぐ”	金沢市立兼六中学校	3	長谷川 愛
私の元気の源（みなもと）	金沢市立大徳中学校	3	宮下 彩香

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第48回全能登私の主張発表大会」

主催 第48回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 平成28年8月21日（日） 9：00～

会場 サンビーム日和ヶ丘

審査委員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）

荒巻 幸子（石川県中能登教育事務所指導課長）

阿部 齊（七尾市教育委員会学校教育課長）

柳浦 勝（七尾市公民館連合会副会長）

佐原加津美（七尾市小中学校校長会代表）

発表者（10名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
笑顔と命のつながりから	七尾市立田鶴浜中学校	3	小浦 百葉
心も伝統	七尾市立七尾東部中学校	3	箕田 和奏
割れたガラス	七尾市立能登香島中学校	2	多田 拓哉
命の大切さ	七尾市立朝日中学校	3	沖 小梅
心通い合わせるために	七尾市立中島中学校	3	横山 絢音
「感謝」の気持ち	中能登町立中能登中学校	3	北野 佑美
心でつなぐもの	七尾市立田鶴浜中学校	3	土倉 早貴
大切な人に今伝えるべきこと	七尾市立七尾東部中学校	3	吉島 穂乃佳
夢を使命に	七尾市立御祓中学校	2	宮下 歩土
「あたり前」のありがたさ	中能登町立中能登中学校	3	久保 咲耶

障がい個性

岐阜県 関市立旭ヶ丘中学校 三年 大見 夏鈴

みなさんは、障がい者についてどう思いますか。私は、自分が障がいをもっているのです。健常の人にどう思われているのか気になります。私は二才の時に罹った病気の後遺症により、耳が全く聴こえなくなりました。そして、人工内耳をつける手術をしました。しかし、はっきりと聴こえるようになったわけではないので、困ることがたくさんあります。例えば、字幕のついていないテレビ番組を観ても内容が全く分かりません。プールでは人工内耳を外せば何も聴こえない状態です。みんなが話しても話の輪にうまく入っていけないこともあります。また、歌は好きですが、自分の歌う声が聴こえないため、自信をもって歌うことができません。

みなさんは、障がい者はいかがいそうだと思いますか。耳の聴こえない私は、かわいそうですか。

今、日本の自殺者は年間二万五千人近くいるそうです。その中に、障がい者は何人いるでしょう。障がい者かわいそうと思うより、悩んで辛い思いをしている人たちを助けてあげてほしいと私は思います。障がい者の中には、サークル活動などで楽しく過ごし、自分の障がいをきちんと受け止めている人たちが多いのです。

私は障がいを個性だと思っています。私は、聴こえないことをつらいと思う時もありますが、悲しくはありません。それ以上に楽しいことがあるからです。それは、手話で話をする事です。手話は聴こえない人の欠かせない言語です。声での会話は、テレビを観ながらでもできますが、手話での会話は、相手に集中しないと成り立ちません。適当に聞くのではなく、相手の表情や口の動き、手の動きを見ながら相手の気持ちを考えて聴きます。つまり、いつも相手と正面から向き合っているのです。私は手話のそんなところが好きです。だから、聴こえる聴こえないに関係なく、多くの人と手話ができたら嬉しいです。みなさんは、車いすバスケットを観たことがありますか。私は、間近で観たことがあります。とても激しいスポーツです。車いす同士がぶつかり合う時などは、あまりの激しさに目を覆いたくなります。

健常者のバスケットとリングの高さは一緒なのに、車いすに座ったまま軽々とシュートを打ちます。その素晴らしいさに、観ている方も非常に盛り上がります。

また、盲聾と呼ばれる、目が見えず、耳も聴こえない方たちがいます。どうやってコミュニケーションをとっているのかわかりますか。実は、その方法の一つに触手話があります。字の通り、手の感覚で手話を読み取ります。先程、手話は相手に集中しないと会話が成り立たないと言いましたが、触手話は触れ合えないと会話が成り立ちません。その分、より深く相手と気持ちを分かち合えるような気がします。友達と目を閉じて触手話をしてみたことがあります。とても難しく、一部しか言葉が通じませんでした。盲聾の方はすごいなあと思いました。私たちは、障がいがあるからこそ、相手とのコミュニケーションを特に大切にしているのです。けれども、困っているときは助けてください。話がうまく通じない時は、紙などに書いて見せてくれると助かります。

このように、どんな障がいをもっているても、本人の考え次第で楽しく生きることが可能です。今、便利な世の中になっていますが、障がいのある人もみんなと無理なく暮らせるようになるには、もう少し時間がかかる気がします。私は、多くの人とコミュニケーションをとり、色々な意見を聞きたいです。そして、みんなが幸せに暮らせる社会の一員になりたいです。私の将来の夢は助産師になることです。障がいをもった赤ちゃんが生まれても「よく頑張ったね」と笑顔で迎えられることができる助産師になりたいです。私は、これからも自分の障がいを個性として、コミュニケーションを大切にしながら生活していきます。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化局県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) [検索](#)

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています